「奇男児」と「烈士喜剣碑」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4940

「奇男児」と「烈士喜剣碑」

徳田　武

『露伴全集』第五巻の冒頭に収まる「奇男児」は、読売新聞の明治二十二年十一月十三日号から十八日号にまで連載された。この作品についての論考は管見に入らないし、また、この作品の原拠について発言したものも無いようである。本稿は、「奇男児」の原拠が林鶴梁の『鶴梁文集』（慶応三年仲秋刊。明治十三年、山中市兵衛発兌の版もあり。）巻六に収められる「烈士喜剣碑」であることを指摘し、その原拠との較量によって「奇男児」を論じようとするものである。

一

まず、「奇男児」の梗概を述べる。

元禄十四年頃の士風の堕弱に憤慨し、薩摩藩を致仕した村上某甲（なにがし）は、「何時にても死申候の看板」をかかげ、男を売っていたが、京都の東山で遊興にのめりこんでいる大石内蔵助の姿を見かける。村上は強引に大石とともに一力茶屋に行き、大石に発奮を迫る。が、大石が侮辱されるがままであるのを見て、「畜生ならば是を食へ」と、「真黒に毛の生ひたる膈を衣引（きぬ）きまくりてさしいだし、足の甲に魚膾（なます）載せて大石の鼻の先に突付」、「内蔵の助這ひながら有難しと喰ふ」を見て、その下顎を蹴りつけて、帰る。

その後、奥州に遊んでいた村上は、十二月十四日の義挙を聞いて、江戸に来り、二月四日に義士一統が切腹仰せつけられたのを知って、ある夜、泉岳寺の大石の墓前で割腹する。その死後には「碑に喜剣の名のみおぼろに」残った。

次に、「烈士喜剣碑」の原文と訓み下し文を記す。

喜剣者。不詳何許人。或云。薩藩士。蓋奇節士也。元禄中。赤穂国除。大石良雄去在京師。時物論囂々。言其有復讐之志。良雄患之。故仮歌舞遊衍以滅人口。一日遊鳴原妓舘。会喜剣亦来遊焉。喜剣素与良雄不相識。然竊希物論不虚。及聞其遊蕩不已。心甚不懌。乃招良雄。同飲于一樓。以微言諷之。良雄不応。因更反復直言。良雄猶不応。笑言自若。無承服色。喜剣乃怒目大罵曰。汝真人面而獸心也。汝主死。汝国亡。汝為大臣。而不知報仇。非獸而何。余将獸待汝。於是展左脚。盛魚膾數臠于脚指頭。使良雄食之。良雄夷然俯首喫之。畢。舐指頭余瀝。時良雄啞々之笑声。与喜剣叱々之罵声。喧然聞乎楼外矣。既而喜剣于役江戸。適聞赤穂人報讐事。問之則同謀四十六人。良雄其首也。喜剣愕然。曰吁余死矣。余目獸視良雄。乃我目之罪也。余舌獸罵良雄。乃吾舌之罪也。余足獸食良雄。乃我足之罪也。余心獸待良雄。乃我心之罪也。一身皆罪。吁余死矣。於是托病帰国。公私了事。復来江戸。則良雄既与同謀之士皆賜死。葬之江戸泉岳寺中。乃詣其墓。拜曰。我当面謝万罪于地下耳。乃抜刀屠腹而逝。有人又葬之其墓側。夫喜剣氏。初之与良雄不相識。而希其有義挙。中之直言忠告。至罵而辱之。終之殺身明志。以謝其罪。雖非中行之士。其奇節可謂不恥古之俠者矣。中西伯基亦奇士也。恒喜談忠臣烈士事。喈喈不離口。嘗憾喜剣有此奇節。而世多不知也。欲別建一石于泉岳寺。略紀事蹟。以示後人。乃齎費金若干。来徴文于余。余時年方二十七八。未嘗作金石文字。固辞。不可。乃約自今学文十年。而後草之。時余貧甚。伯基乃留其金。使余自救。爾来荏苒過二十余年。今則伯基年踰六秩。余亦五十余。皆頽然老矣。余乃為文出金。致諸伯基。遂償両債。嗟乎喜剣之死固奇矣。伯基此挙亦奇矣。独恨余文不奇耳。

（喜剣は、何許の人なるかを詳かにせず。或いは云ふ、薩藩の士なりと。蓋し奇節の士なり。元禄中、赤穂国除かれ、大石良雄去りて京師に在り。時に物論囂々として、其の復讐の志有るを言ふ。良雄之を患へ、故らに歌舞遊衒に仮りて以て人口を滅す。一日、嶋原の妓館に遊ぶ。会ま喜剣も亦た来りて遊ぶ。喜剣素より良雄と相識らず。然れども竊かに物論の虚しからざるを希ふ。其の遊蕩して已まざるを聞くに及び、心に甚だ懌ばず、乃ち良雄を招き、同に一楼に飲み、微言を以て之を諷す。良雄応ぜず。因りて更に反復して直言するも、良雄猶ほ応ぜず、笑言自若として、承服の色無し。喜剣乃ち目を怒らし大いに罵りて曰く、汝は真に人面にして獣心なり、汝が主死し、汝が国亡ぶ、汝は大臣たるも、而も仇に報ゆるを知らず、獣に非ずして何ぞや、余獣を将って汝を待たん、と。是に於て左脚を展ばし魚膾数臠を脚の指頭に盛り、良雄をして之を食はしむ。良雄夷然として首を俯して之を喫し、畢れば、指頭の余瀝を舐る。時に良雄が啞々の笑声と、喜剣が叱々の罵声と、喧然として楼外に聞ゆ。既にして喜剣江戸に于役す。適に赤穂の人の報讐の事を聞く。之を問へば則ち同謀四十六人にして、良雄は其の首なり。喜剣愕然として、曰く、吁、余死せん、余が目良雄を獣視す、乃ち我が目の罪なり、余が舌良雄を獣罵す、乃ち吾が舌の罪なり、余が足良雄に獣食せしむ、乃ち我が足の罪なり、余が心良雄を獣待す、乃ち我が心の罪なり、一身皆罪あり、吁、余死せん、と。是に於て病に托して国に帰り、公私事を了ふ。復た江戸に来れば、則ち良雄は既に同謀の士と皆死を賜はり、江戸の泉岳寺の中に葬らる。乃ち其の墓に詣で、拝して曰く、我当に面り万罪を地下に謝すべきのみ、と。乃ち刀を抜き腹を屠りて逝く。人有り又た之を其の墓の側に葬る。夫れ喜剣氏は、初めにしては良雄と相識らずして、其の義挙有るを希ふ。中にしては直言忠告、罵りて之を辱しむるに至る。終りにしては身を殺し志を明かにして、以て其の罪を謝す。中行の士に非ずと雖も、其の奇節は古の侠者に恥じずと謂ふべし。中西伯基も亦た奇士なり。恒に喜びて忠臣烈士の事を談じ、喋々として口より離れず。嘗て喜剣に此の奇節有りて、而も世多く知らざることを憾み、別に一石を泉岳寺に建て、略ぼ事蹟を紀して、

以て後人に示さんと欲す。乃ち費金若干を齎し、来りて文を余に徴す。余時に年方に二十七八、未だ嘗て金石の文字を作らず。固く辞す。可されず。乃ち今より文を学ぶこと十年、而る後に之を草すことを約す。時に余貧しきこと甚だし。伯基乃ち其の金を留め、余をして自ら救はしむ。爾来荏苒として二十余年を過ぐ。今は則ち伯基年六秩を踰え、余も亦た五十余にして、皆頽然として老ゆ。余乃ち文を為り金を出し、諸を伯基に致し、遂に両債を償ふ。嗟乎、喜剣の死固より奇なり、伯基の此の挙も亦た奇なり、独り余が文の奇ならざるを恨むのみ。)

「奇男児」の梗概と「烈士喜剣碑」(以下、喜剣碑と略称す)を読みあわせれば、後者が前者の典拠であることはただちに判明しよう。ちなみに、喜剣の碑は伯基と鶴梁の在世時には建立されなかった。二人の企画が実現したのは、はるか後の昭和十五年のことであり、その際にも鶴梁の碑文は刻されず、ただ「刃道喜剣信士」という六字ばかりが彫られただけであるという。従って、露伴が喜剣の話を知ったのは『鶴梁文集』に拠ってである。

二

「喜剣碑」と「奇男児」を較量して、更に細かく後者が前者から摂取したものを挙げてみよう。以下、行論の便のために、「喜剣碑」における喜剣のことを喜剣、「奇男児」における喜剣のことを村上と呼び分けることにする。

第一、喜剣は「薩藩士」であるが、村上も薩摩藩士である。

第二、喜剣は大石のことを「人面而獣心」と罵るが、村上も「人間の皮かぶりて両刀さしたる畜生武士」(第五)と同様な表現で罵る。

第三、「喜剣碑」の原文と「奇男児」の梗概を読みあわせれば、おのずから理解されようが、「展左脚。盛魚膾数臠于脚

指頭。使良雄食之。良雄夷然俯首喫之。」という場面は、「足の甲に魚膾載せて大石の鼻の先に突付るを、内蔵の助這ひながら有難しと喰ふ」と、ほとんど逐語訳ともいえそうなかたちで採られた。それは、原文の当該場面の上欄に「森田節斎曰、写生、写生。」という評語が特に付せられていることからわかるように、原文の中でもとりわけそこが情景を写実的に生き生きと描いているからであろう。

第四、「喜剣碑」では、題名がすでに語っているように、中西伯基(1)と鶴梁が協力して喜剣の碑の建立を計画したことが述べられているが、「奇男児」の末尾に「腹割剖きて音もなく死したる後は、碑に喜剣の名のみおぼろに、松杉暗く月光弱し二百年の春の夜毎。」とあるのは、それを踏まえたことになる。前述したように、露伴が「奇男児」を執筆した時点では碑は建立されていなかったのであるから、露伴は現実のそうした状況に基いたのではなくて、『鶴梁文集』の記載に拠って現に碑が立っているように書いたものと考えられる。

三

典拠を踏まえた様相は以上の如くであるが、典拠から離れている点も考慮に入れることが露伴の作意を知るためには必要になる。そこで、次に典拠ばなれの点を検討しよう。

第一、「喜剣碑」では喜剣に姓が与えられていない。これに対して、露伴は村上という姓を与えた。姓が無いままでは落ちつかないからであろう。

第二、喜剣は、「一日遊嶋原妓館」と、みずから進んで遊興の巷に入ったことになっている。が、村上は、「恥かしながら我等無骨者、鴨河の水に磨かれし美人を知らず赤前垂の女に詞を交せし事なく、三十になって未だ色酒の味何程の甘みあるといふ訳をしらず」と、まったくの木強漢として造形されている。露伴の意図は、元禄の世相を柔弱と憤る人間像を浮き

彫りすることにあったから、そういう男が嶋原の妓館で遊ぶのはまずいわけである。そこで、色遊びをしたことがないという設定に改めたのであろう。

第三、喜剣は最初、「以微言諷之」と、おだやかに遠まわしに大石を諫めている。そこには自己の感情を抑制して言辞に工夫を施すという、一応の理智を備えている人間像が描かれている。ところが村上は、初めから大石に「天地を憚からぬ大声高く投出した様に述べ立」てていて、抑制や配慮を持たぬ、理智のほとんど感じられない男になっている。これも、村上を徹底した朴念仁として造形するという意図に基くものであろう。

第四、典拠は簡潔を旨とする漢文ゆえに、描写を極力抑制している。が、露伴はこれを委曲精緻な描写を事とする近代小説に仕立てあげようとしているのだから、村上の人となりについても、赤穂の街のさびれた様子にしても、村上と大石との出会いとからみにおいても、詳細で活き〳〵とした描写を大きく加えている。そして、その描写が当時の読者を感動させるほどのものであったことは、稜骨子の「奇男児」評に如実に窺うことができる。(2)

第五、「奇男児」第四章には階層にふさわしい酒の飲みかたについての論が説かれている。その論は、萩の門忍月が「此一段は奇絶快絶飛瀑直下雷鳴り山動き、玉砕け雪飛ぶの奇観あり」(3)と讃えたほど痛快なものであったが、これもまた露伴の加筆であった。

四

「奇男児」が当時に好評をもって迎えられたことは、稜骨子・忍月の批評、及び撫象子の「葉末集」(「女学雑誌」二二〇号　明治23年7月5日。『露伴全集』付録一五七頁)等がおのずからに語っている。その好評を招いた理由も、稜骨子の次の文章が端的に喝破していよう。

人漸く佳人才子的の恋情小説に倦んで勇膽壮偉的の奇抜小説を希ふ、此時に当って俄然健児社会の耳目を聳動せしめたるものあり、何ぞや、曰く、先つ頃読売新聞紙上に於て――否な寧ろ吾が文学界に於て一種出俗異風の光彩を放ちたる露伴子の奇男児是なり、

即ち、勇膽壮偉な小説を待望する世の好尚に「奇男児」が合致したからである。

当代の読者が「奇男児」の勇膽壮偉を喜んだことは、かくの如くであるが、その反応は、露伴が「喜剣碑」を典拠として選んだ理由とほぼ通底する、と思われる。

彼はなぜ「喜剣碑」を粉本としたのか。この問題を考える手掛りになるものは、「喜剣碑」の後に諸家が付した評語である。

斎藤拙堂曰く、奇人奇事、文亦た之に稱ふ。(原漢文。以下同じ。)

又た曰く、此の事僕創聞たり。今此の篇を得て始めて之を識る。一読の余、爽然として自失す。

山田方谷曰く、文の奇、固より以て二士の奇に副ふに足る。而して文を為りて金を出し、以て両債を償ふ。亦た一大奇なり。併せて四奇と称して可なり。

藤森弘菴曰く、奇文必ず伝はる。

長野淮海曰く、人奇にして文以て之を称するに足る。

森田節斎曰く、気節の士を以て、気節の士を写す。其の文安んぞ奇ならざるを得んや。

諸家いずれも喜剣の奇を指摘する。奇とは、この場合、森田節斎もいうように、凡俗の持ちえない気節と同義語である。すなわち、一世の大家はこぞって、大石を痛罵した罪を死をもって償うという彼の気節にうたれている。

この気節を露伴が嘉しないはずがない。なぜならば、前作の「風流仏」で剛毅な意志の力によって煩悶を克服するという

主題を描いたことに窺える如く、彼はすぐれて精神・意志の力を恃む、唯心的な作家だからである。精神家は精神家に共鳴する。強い意志をもって自裁した喜剣は、露伴が必ずや共感を寄せた人物であるのに相違あるまい。この共感こそ露伴を駆って「喜剣碑」を典拠とさせた理由になろう。

このことを別の方面から証するものが、「奇男児」という題名である。その「奇」という語は、思うに、諸家が強調する奇から取ったものであろう。また、本文中の「奇節士」「奇士」という言葉からも取ったであろう。いわば、「奇」は「喜剣碑」の鍵語ともいうべき語だが、その鍵語を題名に使用したということは、喜剣の気節をそれだけ浮かびあがらせようとしたことであり、気節にそれだけ魅かれていたことを語るものでもあろう。

五

前述したように、露伴は喜剣の気節に共鳴し、それを我が作品の主題とした。それは、露伴の精神の内部に気節の士としての要素が含有されていることを意味しよう。気節の士としての要素を備えているからこそ、「烈士喜剣碑」のような文章を読むとその要素が刺戟され、頭をむくむくと起してきて、それを自己の作品に仕立てあげようとする力が湧いてくるのである。その主題を選ぶということは、作家の精神の内にその主題に合致するものがあるからだ、ともいい変えられようか。このような意味において、露伴もまた気節の士だ、換言すれば、奇男児だ、ということができよう。[4] 森田節斎が林鶴梁の文章を「気節の士を以て、気節の士を写す」と評したのも、また以上のような意味においてであると思われる。とすれば、幸田露伴の「奇男児」とは、「気節の士を以て、気節の士を写した」「奇文」（藤森弘菴の語）だ、ということができる。

露伴の「奇男児」は、このように江戸時代の漢学諸家の言葉を借りて概括することが、できるのだが、それは明治の「読

者の「勇膽壮偉的の奇抜小説」という評語と、ほとんど同義語であろう。つまり、江戸期の漢学諸家が「烈士喜剣碑」から感じ取ったものと、明治の読者が「奇男児」に感得したものとは、大むね同様な興趣だったのである。この意味において、「奇男児」は近代版の「烈士喜剣碑」だといえよう。

注

(1) 中西伯基に関しては、多治比郁夫氏に「活版先生中西忠蔵」(『中村幸彦著述集』第14巻月報)がある。

(2) 「織巧精緻無量の隠微を発見し無限の風味を帯ぶる」(『国民の友』六九号、明治二三年一月三日。『露伴全集』付録所収)。

(3) 「葉末集」(『国民の友』八九号、明治二三年七月二三日。同前)。

(4) 「谷崎潤一郎が「奇男児」を著わした露伴のことを評して「熱情漢でなければ書けない」(「饒舌録」)といったのも、同様なことをいっているのである。